
天使ごっこ

徳山 ノガタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使ごっこ

【Zコード】

N1906D

【作者名】

徳山 ノガタ

【あらすじ】

高校生の橋村亮^{リョウ}は、ある日見知らぬ少年に声をかけられる。その日から、リョウの周りで小さな“幸運”が連続して起こりだした。そんな時、恋人のあかりが事故に遭い…。主人公の視点で不思議な少年を追うライトファンタジー。

秋口にしては蒸し暑く、けだるい午後だった。

俺 橋村亮は、今日も退屈な授業を聞き流し、高校生としての“勤め”を果たして下校するところだった。

暑い。こんな日はクーラーの効いたコンビニで時間を潰すか、さつさと家に帰るかに限る。俺は後者を選ぶことにし、校門を出ようとした。すると、

「 いんこちは」

突然、後ろから声を掛けられた。振り返つてみると、俺と同じ制服の男子が立っていた。

知らない顔だ。やや童顔で、中性的な風貌。そして、その少年はうつすらと微笑んでもう一度俺に声を掛けてきた。

「 いんこちは」

「 ……あ、ああ」

とりあえず返事をしてみる。しかし、どうも「後輩が先輩に挨拶をした。」という感じではなさそうだ。何か用件があるのでう。

「ええと、お前は……」

誰だ？ と、言つ前に、

「久し振りだね」

向こうが声を被せてきた。意外にもタメ口だ。

「久し振り……？」

「うん。ほら、あの時の……」

「あの時……」

何の事だか、サッパリだ。困っていると、タイミングよく携帯に電話がかかってきた。

「あ、悪い。ちょっと電話出るから

わけのわからない会話を中断させてくれたありがたい人物は、俺の彼女 あかりだった。

あかりとは子供の頃から”友達”としてよく遊んでいた。それが中学、高校となるうちに周囲から冷やかされるようになり、いちいち否定するのも面倒だから付き合ってしまおつか そう考えて”恋人”になった。

「もしも～し、リョウ？ えっと、今度の日曜日のことだけど……」

「おう、どうした？」週末に一人で買い物に出かける予定だったのだ。

「あれ、やつぱり土曜日でいい？ 日曜は別の用事入っちゃって
る」

「別に構わねーよ。何の用事だ？」

やや聞をおいて、口(こと)もりながら答(こた)えが返つてくる。

「ん、ちょっと家族関係」

聞いた俺が悪かった。あかりの家は両親の仲が悪く、離婚は秒読みだった。おそらく、本格的に離婚が決まったのだろう。

「そうか。それじゃあ土曜日だな」

「うん。よろしく〜」

電話を切つて、フツとため息をつく。あかりの家庭も気になるが、またさつきの少年と話をするのが面倒だ。

しかし、その問題はすぐに解決した。

「……あれ？」

いつの間にか、少年は消えていた。周囲を見回すが、どこにも見当たらない。

「……ま、いーか

考(かんが)えてもわからな(わから)いことは考(かんが)えない。それが俺の哲学(せきがく)だった。

翌日。朝っぱらから俺はヒステリックな叫び声を聞かされることになった。その声の主は、俺の姉貴だった。

「信じられない！ あれほど言ったのに……」

ギヤー、ギヤーと騒がしい。どうやらまた、彼氏とイザザコザを起こしたらしい。

「ふざけんなっ！ バカ野郎！」

姉貴はそう叫んで携帯をソファに叩きつける。壁や床に叩きつけなかつただけまだマシだが、八つ当たりされる携帯はたまたまんじゃないだろう。

「もーっ、サイアク！」

すぐそばで聞いてるこっちもサイアクだ。朝から大声でケンカしないで欲しい。

「行つてきまーす……」

どうせ誰も聞いていないだろうが、一応言つて登校する。

やれやれ、これでまたしばらくの間姉貴のご機嫌取りをするはめになった。早いとこ怒りを鎮めないと何日もあんな感じだ。以前は2週間ほど怒りが続いていたこともあった。よくもまあ、そんなに感情が持続するものだ。呆れを通り越して歎心できる。迷惑だが。

歩いて10分ほどでバス停に着く。しかし、ここで俺は重大なミ

スに気が付いた。

「やべっ定期入れ忘れてきたか！？」

すでにバスは到着しており、この便を逃すと確実に遅刻だ。俺は成績があまりよくないため、出席点を重視しているのに。マズい。

「くそつ！ 姉貴が騒いでたせいだ！」

叫んでは見たものの、これからどうするべきか分らない。と、その時。

「ハイ、これ。そここの交差点に落ちてたよ」

そう言つて定期入れを差し出したのは、昨日の少年だった。

「お、お前！ 昨日いつの間に……」

俺は問い合わせようとしたが、そいつは微笑んでこいつ答えた。

「出ちゃうよ、バス。急いで」

確かに、バスの運転手が何か言つたげにこちらを見ている。早く乗つた方がよさそうだ。

「それじゃあ、またね。リョウ君」

そう言つて少年は走り去つた。

(リョウ君つて……馴れ馴れしいな……誰だ？どこかで会つたか？)

…「ひの制服着てたけど、バス乗らないのか？」

バスの中で色々と疑問が湧いてきたが、俺は哲学に従つことにしてた。

「のことを皮切りに、そいつは度々俺の前に現れるようになった。

翌日、俺が家を出た途端に出会い、雨が降るよ、と一言だけ言ってすぐに走り去った。その日はよく晴れていたが、午後になつてポンポンと小雨が降り出した。また、その日の下校中にも現れ、俺がずっと前に失くしていた腕時計を差し出し、またも田を離した隙に消えていた。

「なんなんだらつね。その子」

「の話を聞いて、あかりはコーヒーをかき混ぜながら囁つ。

今日は土曜日。俺とあかりは買い物を済ませてファミレスで休んでいるところだ。

「全く心当たりがない。すぐにはなくなるしよ」

「けど、その子ってショウウの役に立つことしてるやね」

「ああ。昨日の夜なんか、姉貴が彼氏とヨリもどして『機嫌ですよ。何でも知らない男の子が話聞いてくれて、それがきっかけになつたんだとか』

「へー？」

「その男の子の特徴聞いたら、やっぱりアイシング！」

「スゴイ… その子って、もしかして天使じゃない？」

そう言つてコーヒーを飲み干す。あかりは普段大人びているくせに時々子供じみたことを言い出すことがある。当然本気で信じているわけではないが。

「な、らいいけどよ。なんか氣味が悪いんだよなあ……俺、なんかしたか？」

「ほら、アレじゃない？ 2週間ぐらい前、事故にあつた赤ちゃんを病院まで運んだじゃない」

「ああ。あん時は必死だつたな……けど結局、母親の方は死んじまつたんだよなあ……」

街まではバスで来たのだが、まだ時間があるのでバスを使わずに歩いて帰ることにした。いつも車窓から見ている道も、自分の足で歩いてみると少し違つて感じられた。

「ねえ、リョウ。ちょっとといい？」

人通りの少ない路地裏で、あかりが立ち止まる。その目的を俺は予想していた。

「……親、別れるんだろう？」

「……うん……」

やつぱつだ。元々買いたい物はただの呼び出しか実だったのだ。

「お母さん、実家の田舎に帰るつて。明日。もう荷物もまとめ終わつてる」

「……やつか。それで、お前はどうあるんだ？」

「お父さんといつぱちに残る。だつて……」

「だつて？」

「だつて、の次は？」

「もう一度俺が言つと、あかりは田をやらいして言つた。

「……コロハと、こつしょここにたいかう……」

「えつ……」

「友達の延長線上みたいに付き合つてきただけど、こつつの間にか、本気で好きになつてたみたい……。コロハの」と……

「正直に言つて、少し

「意外、だな。」

「……どうして……？」

「本気になつてたの、俺だけじゃなかつたんだ

謎の少年の事も、離婚の事も、しばし忘れて、俺はあかりは抱きしめた。

その様子を、物陰からあいつが見ていることも気が付かず。

翌日の日曜日、今まで寝ていつとと思っていた俺は、当然誰かにたたき起された。

「なんだよ……姉貴……っ！」

しかし、俺を起したのは姉貴ではなかつた。アイツだった。

「リョウ君、起きて」

窓の鍵はかかっているのに、そいつは俺の枕元に立つていた。

「お前、どこから……？」

「あかりさんが……あかりさんが大変なんだ！」

「あかりが……ー？ 何でお前あかりのことを？」

「これを見て」

そう言って、そいつは俺の額に手をあてる。

「うわっー？」

脳裏に映像が流れてくる。あかりだ。あかりが家の前で母親とい争いをしている。

「どうじてー? どうじてそんなに勝手に決めちゃうのー?」

「ゴメンね。でも、もう向こうの人に話してるから……」

「それが勝手なのよーどうじてあたしが引っ越せなきゃいけないのー?」

(引っ越す……?)

「あたしはこの町を離れたくないのー」

「そんな……ワガママを言わないで。お母さんと一緒にいようと」

「うわよ

「なによ、ワガママってー。ちつともゴメンねって言つたでしょー? それ、自分が悪いって認めてるんじゃないのー?」

「でも……」

「イヤよ……絶対にイヤー!」

「あかりー! ビーに行くのー?」

突然、あかりは母親を振り切つて駆け出した。

「イヤよ……やつとつヨウと本当の恋人になれたのに……」

（あかり……）

あかりはどんどん走つて行つた。どうやら俺の家に向かつているらしい。

石段を登つて狭い通りに飛び出た時、居眠り運転のトラックが猛烈な勢いで突つ込んできた。

（危ないっ！）

「キヤアッ！」

辛うじてトラックを避けるが、バランスを崩して石段を落ちて行つた。

周囲に人はいない。あかりは頭を強く打ち、口を切つて血を出しながら、かすれた声を出している。

「リヨウ……

「あかりっ！」

気がつくと、俺は再び自分の部屋にいた。目の前にアイツがいる。

「早く行つてあげて。早くしないと……

「つるせえ！ わかつてんー。」

俺はすぐに家を飛び出してあかりのもとに向かつた。

アーツが何者なのか、そんなことはどうでもいい。あの階段はあまり人が通らない。俺が行かなければ……！

「あかりっ！」

10分程で、そこに辿り着いた。

「あかりっ！ しつかりしろー！」

「…………ウ…………？」

うつろな目でつぶやく。意識を失いかけていくようだ。

「よか……つたあ……また、あえ……た……。最後に……リョウ
ヒ……。」

「なに言つてんだ！ 最後じゃねえ！ 助けてやるー！」

しかし、携帯は家に置いてきてしまつていて。近くに人の気配はない。抱きかかえて病院に運ぼうにも、頭を打つていてのでは下手に動かせない。

「無理だよ…… もう。おや……すみ……」

あかりは静かに目を閉じる。まだ息はしているが、いつまでもつか分らない。

「じうじうつてんだよおおおおおおつー！」

その場に座り込んで、俺は叫んだ。肝心な時に無力な自分が悲しかった。と、その時。

「リョウ君」

背後から声がした。振り向くとアイツだった。

「お前！」

俺はそいつの前に跪いて、泣きながら叫んだ。

「お前……！ 頼む、助けてくれ！ 何者かなんてビリでもいい、誰でもいいから、あかりを助けてくれ……っ！」

恥も外聞も捨てて、必死に頼み込んだ。目の前にいるこいつだけが、最後の希望だった。

「……初めてだね。君の方からボクにお願いするの」

「いいから！ 頼む…」

「……わかったよ」

そう言つた瞬間、そいつの体が突然光りだした。思わず目を瞑り、再び目を開けると……。

「なつ…？ びょ、病院…？」

「おいつ、君…どうしたんだ！」

「この間にか俺とあかりは、病院のすぐ前にいた。ちゅうじ中から出てきた医師らしき男が俺たちに気付いて声をかける。

「その女の子は……」

「石段から落ちたんだ！ 手当てしてくれ！」

すぐに担架が出てきて、あかりは病室に運ばれて行つた。様子を見た医師によると、今すぐに治療を施せば命に別状はないらしい。

俺はホッとして、病院の屋上に上がつた。なにがなんだかわからぬが、あかりが助かつたのは嬉しかつた。

「よかつた……本当に……」

柵にもたれて道路を見下ろしていくと、背後に人の気配がした。俺は振り向かずに話しかける。

「礼を言つ前に、そろそろはつきりさせたい。……誰なんだ、お前」

「……」

そいつはしばらく黙つていたが、やがて口を開いて言つた。

「ボク、会つたことあるんだよ。リョウ君に

「……こつだ」

「2週間前。今日みたいに、ケガしていたところを助けてくれた

2週間前？

「あの時俺が助けたのは、確か赤ん坊……」

「そうだよ」

「聞き間違いではない。確かにそいつはそう言った。」

「その赤ちゃんが、ボクなんだ」

！？

「ボクは今、リョウ君と同じ年くらいの姿をしているけど、本当のボクは生後半年の赤ちゃん。リョウ君が助けてくれた」

俺は振り向いてそいつを見つめる。どう見ても、高校生にしか見えない。

「リョウ君に助けてもらった後も、ボクの体は田を覚まさないんだ。何度も起き上がるとしてなんだけど、まぶたを開けることもできなかつた。ずっと、真っ暗だつた」

そいつは淡々と話を続ける。

「真っ暗な中で、ボクは思ったんだ。リョウ君のことを。田は覚めないけど、命を助けてくれた君に恩返しがしたい、って

「恩返し……？」

「お母さんが読んでくれた絵本の内容を無意識に覚えていたのか、それとも前世、つてものからの記憶なのか知らないけど、ボクは天使に憧れていた。リョウ君がボクを助けてくれたように、今度はボクが天使になつてリョウ君を助けたいって、思つたんだ」

「……」

「そうしたら、ボクはいつの間にか体を抜け出していた。そして、空を飛んでリョウ君に会いに行つたんだ。赤ちゃんの姿だと何もできないから、今のこの体になつてね」

「そ、それじゃあお前……魂……みたいなものか!?

「よくわからないけど、そうみたいだね。魂だけになつたボクはいろんな力を使つことができた。それで、リョウ君の役に立ちたかつたんだ」

「……そ、うか。まあ、何つ一つ……ありがとな。おかげで、あかりも助かつたし」

俺がそう言つと、突然そいつは表情を暗くした。

「実はね。ボク、もうすぐ消えちゃうんだ」

「え?」

「病院まで一瞬で移動させるのに、エネルギーをかなり使つたんだ。今、こうしてこの姿を保つのが精一杯。これ以上力を使うことは出来ない」

「エネルギー…………？」

「それに、ボクの体はずつと田覓めないまま。きっともうすぐ死んじゃうんだと思う。体がどんどん弱まっていくを感じるもの」

！？ 今、こいつはなんて言つた？ 死ぬ…………？

「もう、今にも消えそう。でも後悔はないよ。リョウ君に恩返しができだし、天国に行つたら本当の天使に会えるかもしれないから」

死ぬ…………？ エネルギー…………？ 恩返し…………。頭の中を言葉が渦巻く。なにか、得体のしれない感情が込み上げてきた。

「ゴメンね。もう、恩返しきできなくて…………」

「違う…………？」

俺は叫んだ。突然の大声に、そいつは驚く。

「違う…………？」

「お前は……本当の恩返しができてないっ！」

自分の言葉に、自分で驚いた。俺はなにが言いたいのだ…？

「その、お前が使つたエネルギーってのは一本當はお前が生きるために使つエネルギーなんだ！ それをお前は…………」

「でも、僕はリョウ君のために…………」

「それが違う! 本当に俺のためになりたかったら、生きり! 生きて、元気になることが、一番の恩返しだ!」

よつやく、自分の言いたいことが理解できた。

「イヤなんだよ……せつかく助けた奴が、自分のせいで死ぬなんて……」

「……」

長い、沈黙だった。怒りなのか、悲しみなのか。よくわからないが、熱いものが目に溜まってきた。

「でも、ボクは……」

今にも泣き出しそうな声で、そいつが沈黙を破った。

「もうダメなんだよ! あんな真っ暗な闇で生きるなんて、ガマンできなこよおつ!」

そう呟ぶと同時に、そいつの姿が突然ぼやけ始めた。

「お、おいつ!」

俺の田の錯覚ではない。そいつの姿は徐々に崩れて、淡い光の固まりになつた。

「どっち道、もう手遅れだよ! ボクには、もう何もできないよ! 助からないよ!」

光の中からせいつの声が響いてくる。明らかに泣いている声だ。

俺はその光に向かって、もう一度叫んだ。

「助ける！」

心の奥底から、叫んだ。

「俺が助けてやる！ 俺は……そんな不思議な力は使えないけど……けど！ 助けてやる！ 何度も、何回でも……！」

「……どうして？」

声が響く。

「どうして、こんなボクを助けてほしいの……？」

「……だってよ。俺たち……」

「ボク達……？」

「もう、友達だろ」

「……」

「実際のトシは離れてるけど、友達だと想つてる。……違うか？」

「友、達……」

そいつの涙が止まつた、と思つ。

「また……」

再び光が話す。

「また、会えたら、もう一度友達だって呼んでくれる……？」

「ああ」

力強く、はつきりと俺は言つ。

「また会おう。今度は、あかりと三人で」

「……うん」

ゆづくつと、光が薄れて消えた。体のところに戻つたのだろう。

「……頑張るつな。互いに」

ポツリと独り言を言い、俺はあかりの病室に向かつた。

「リョウー！」

病室に入るや否や、あかりが俺の名を呼んだ。

「あかり！ 大丈夫なのか！？」

あかりの側にいた医師が代わりに答える。

「ええ。激しく動かない限りは大丈夫でしょう。若さが幸いしましたね」

「へへ。ゴメンね、リョウ。心配かけちゃって」

ベッドに寝たまま、あかりが笑う。

「ちよつと良かった。リョウ、車椅子乗せてくれる?」

「あ? 車椅子?」

「まだ歩くのは無理ですが、車椅子なら結構です。ただし、できるだけ静かにお願いします。私は他の患者を診てきますから」

そう言って医師は病室を出ていく。俺もあかりを車椅子に乗せ、廊下に出る。

「あたし、初めてだ。これ乗るの」

「……どちらに行かれますか? お嬢様」

少しあどけて聞くと、あかりがクスクスと笑った。よかつた。
心からそう思つ。

その時、近くの病室から先ほどの医師の声がした。

「やつた! 奇蹟だ! 田を開けたぞ!」

驚きと歓喜の声だ。俺は車椅子を押して急いでその病室に入る。

そこは、重症患者の個室だった。医師と看護師があわただしく動き回るなか、俺はまっすぐにベッドを見た。

「リョウ。あの子、じつち見てるよ。なんだか嬉しそう」

「……ああ」

笑っていた。俺もあいつも。

「友達に会えたみたいにな」

天使は、いるのかも知れない……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1906d/>

天使ごっこ

2010年12月3日06時17分発行